

## 執筆紹介

ながえ	まさかず	永江 雅和	本学経済学部教授
つちや	まさあき	土屋 昌明	本学経済学部教授
おおたに	ただし	大谷 正	本学文学部教授
すがわら	ひかる	菅原 光	本学法学部教授
まえかわ	じゅん	前川 亨	本学法学部教授

## 〈編集後記〉

5月号のお届けが大変遅くなり、申し訳ありません。中国関連が二本、そして地名論が一本です。これらの論稿に対して、より発展した議論の場が拡大されんことを願っております。以下に独断の意見を述べさせていただきますので、それらがたたき台にでもなれば幸いです。

永江先生の地名論について。イメージ優先の新地名（創作地名）が、地域住民の街づくりに貢献している。そして必ずしも旧地名の維持が街づくりに有効であるとはいえない。重要なのは、地域住民が地名にいかにか愛着 Topophilia をもてるかであり、確かに祭りの維持や自治会の活動の程度が一つのメルクマールになるだろう。余計なことですが、小田急線沿線の住宅地で、梅や柿を植えることは比較的日常的にある時期に行われていたことはないでしょうか？ つまり、「梅ヶ丘」「柿生」は珍しくない？

土屋先生の「映像歴史学」と、大谷先生の「日清戦争論」について。

ホワイ川上流域での「喜多発地域」（日本の公害問題と通じる）や、貴州省で起こった出稼ぎ農家の孤獨な児童たちによる農業自殺の事件は、今さらながら胸が痛む。

政権の弾圧を取り扱った「星火事件（1960年）」は、従来の歴史にはほとんど採りあげられてこなかった。新しい中国の歴史の1ページである。重要なのは、この事件には大飢饉に対する危機意識が存在しており、死者の多くが餓死であるといった事実である（土屋論文）。国家や特に地方の腐敗がこれらの底流にあり、真の社会主義国家を願うドキュメンタリー監督の熱意と勇気には、賛美を送りたい。土屋先生には今後も精力的に仕事を続けられると思いますが、より広範囲に普及するためには、図、表や写真などを駆使して、より一層鮮明に、コンパクトに言及していただければ大きなうねりになることは確実でしょう。

最後の「日清戦争」の鼎談について。門外漢故、専門的なコメントはできませんが、感想を2点述べます。一つは、大谷先生のお人柄が出ているのですが、「日本のことばかりやっても分からないよ、もっと外国のものもちゃんと勉強するように」のことばの意味するところです。巷でグローバルな視点が氾濫している。わが地理学の分野でも結節（性）という言葉が煩雑に使用される。つまり、ある事件（現象）は周囲の事情との関係性のなかで生じる。外圧や外発性が、事件（現象）と深く関連している。確かに街づくりでは、内発性や内発的發展が重要であるが、戦争や紛争の要因には代理戦争などの言葉もあるように「外の世界」は大切である。「日清戦争」の研究も、アジアや世界の状況把握も重要なかもしれません。

二つ目は、戦後70年問題である。前川先生の「感想と補足」でも言及されているように、日本の不十分な戦後処理と同時に、戦前との連続性を清算していないことが、現在の日本たたきを正当化するナショナリズム（ナショナルな意識の高揚）に至っている。正当な歴史（光の部分？）に対し、「影の部分」の歴史を主唱する前川論は、戦争や紛争、植民地などの研究に新しい光が射し込むことはまちがいない。

（福島義和）

2015年5月20日発行

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

（発行者） 村上俊介

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561